

序文



小児医療の王道は一次救急にあると言っても過言ではないと思います。どんなに専門領域で業績を上げていようと、一次救急ができない、一次救急をやらない医師は小児科医とは言えないのではないのでしょうか。

とは言っても一次救急は上っ面な知識だけでは務まりません。判断を誤れば重大な事態を招くこともあります。もちろん各臓器別、病態別の専門領域についてもそれなりの知識と経験が必要であることは言うまでもありません。ただ、各領域の専門診療では、ある程度診断の方向性がついている患者が主な対象であり、まれな疾患も含めて各論の知識が最も求められることになります。その一方で、一次救急では、まだ海のものと山のものと判断がつかない初期症状、軽微な症状、非特異的な症状を訴える患者を対象とすることが多く、専門領域の診療とは全く別のスキルが必要となります。

どんな疾患でも小児では一般的に進行が早いと言われているため、一次救急で見逃してしまうと思わぬ重症化に繋ることがあります。帰宅させて良いのか、二次救急に紹介するべきか、何を根拠に判断すれば良いのか、それは小児科医であれば誰でも直面する永遠のテーマかもしれません。キーワードは、「病名」でも「重症か否か」でもなく、「重症化するかどうか」であろうと考えられます。

本書の企画意図は、「帰宅可能か？ 二次救急か？」という視点から小児一次救急のバイブルを作成するというものでした。まず、一次救急の基礎的一般論から始まり、症状別アプローチに特に重点を置いて編集されています。次いで、主な疾患について解説を加え、事故や外因による病態への対処にも言及していますが、重症な場合に必要な処置については最後に記載されています。本書が「重症化するかどうか」の判断の基準を示すことに力を注いだことの現れであります。一次救急では必ずしも診断名を特定する必要はありません。放っておいたら重症化してしまうかどうかの判断が最も重要なのです。本書は診断学や救急医学の成書ではありません。最前線の一次救急の現場で座右の書として皆様の実践的一助となることを願っています。

「小児科」編集委員一同
